

サビーネ・フリューシウトウック／アン・ウオルソール 一編著一  
長野ひろ子 一監訳一 内田雅克／長野麻紀子／栗倉大輔 一訳一

# 日本人の

Recreating Japanese Men

サムライからオタクまで  
「男性性」の変遷を追う

# 「男らしさ」

明石書店

[訳者紹介] (\*は監訳者)

\*長野ひろ子 (ながの・ひろこ) [第1章、監訳者あとがき]  
中央大学経済学部教授。日本経済史、ジェンダー史。主な著作に『幕藩制国家の経済構造』(吉川弘文館、1987年)、『日本近世ジェンダー論——「家」経営体・身分・国家』(吉川弘文館、2003年)、『ジェンダー史を学ぶ』(吉川弘文館、2006年)、『ジェンダーで読み解く江戸時代』(共編著、三省堂、2001年)、『エスニシティ・ジェンダーからみる日本の歴史』(共編著、吉川弘文館、2002年)、『日本近代国家の成立とジェンダー』(共編著、柏書房、2003年)、『経済と消費社会』(『ジェンダー史叢書』第6巻) (共編著、明石書店、2009年)、『歴史教育とジェンダー——教科書からサブカルチャーまで』(共編著、青弓社、2011年) など。

内田雅克 (うちだ・まさかつ) [第4・5・9章]  
東北芸術工科大学芸術学部/教養教育センター教授。ジェンダー史、英語教育学。主な著作に『大日本帝国の「少年」と「男性性」——少年少女雑誌に見る「ウィークネス・フォビア」』(明石書店、2010年)、*Interactive English Book for Reading 1, 2, Interactive English Book for TOEIC 1, 2* (松柏社、2012年)、*SMART TALK* (三省堂、2004年)。翻訳に「百姓一揆にみる暴力とジェンダー」(『ジェンダー史叢書』第5巻『暴力と戦争』明石書店、2009年) など。

長野麻紀子 (ながの・まきこ) [序章、第2・3・6・8・10・11章]  
ロンドン大学ゴールドスミスカレッジBAファインアート科(スタジオプラクティス&クリティカルスタディーズ)卒業。

栗倉大輔 (あわくら・だいすけ) [第7章]  
中央大学大学院経済学研究科博士後期課程。近代日本経済史。主な著作に「東海道線開通前の静岡県の茶業と海上輸送」(『中央大学大学院研究年報』(経済学研究科篇)第39号、2010年)、「明治期における「再製茶女工」とその再評価」(『中央大学経済研究所年報』第43号、2012年) など。

## 日本人の「男らしさ」

——サムライからオタクまで「男性性」の変遷を追う

2013年1月25日 初版第1刷発行

編著者	サビーネ・フリューシュトウック アン・ウォルソール
監訳者	長 野 ひ ろ 子
発行者	石 井 昭 男
発行所	株式会社 明石書店 〒101-0021 東京都千代田区外神田6-9-5 電話 03 (5818) 1171 FAX 03 (5818) 1174 振替 00100-7-24505 <a href="http://www.akashi.co.jp/">http://www.akashi.co.jp/</a>
組版	朝日メディアインターナショナル
装丁	明石書店デザイン室
印刷	株式会社文化カラー印刷
製本	本間製本株式会社

(定価はカバーに表示してあります)

ISBN978-4-7503-3745-6

[原著者紹介] (\*は編者)

\*サビーネ・フリューシュトゥック (Sabine Frühstück)  
カリフォルニア大学サンタバーバラ校 (近現代日本研究) 教授  
著書に *Colonizing Sex: Sexology and Social Control in Modern Japan* (University of California Press, 2003)、*Uneasy Warriors: Gender, Memory, and Popular Culture in the Japanese Army* (University of California Press, 2007) など。後者は『不安な兵士たち——ニッポン自衛隊研究』(原書房、2008) として邦訳出版。

\*アン・ウォルソール (Anne Walshall)  
カリフォルニア大学アーバイン校 (日本史) 教授  
著書に *The Weak Body of a Useless Women: Matsuo Taseko and the Meiji Restoration* (University of Chicago Press, 1998)、*Servants of the Dynasty: Palace Women in World History* (University of California Press, 2008)、*East Asia: A Cultural, Social, and Political History* (共著、Wadsworth Publishing, 2008) など。前者は『たをやめと明治維新——松尾多勢子の反伝記的生涯』(ペリカン社、2005) として邦訳出版。

テレサ・A・アルゴソ (Teresa A. Algoto)  
カリフォルニア大学サンタバーバラ校歴史学科博士課程。フルブライト奨学生  
論文に *Thoughts on Hermaphroditism: Miyatake Gaikotsu and the Convergence of the Sexes in Taishō Japan* (*The Journal of Asian Studies* Vol. 65, 2006) など。

イアン・コンドリー (Ian Condry)  
マサチューセッツ工科大学 (比較メディア研究) 准教授。文化人類学者  
著書に *Hip-Hop Japan* (Duke University Press, 2006) など。同書は『日本のヒップホップ』(NTT出版、2009) として邦訳出版。

クリストファー・ガーティス (Christopher Gerteis)  
ロンドン大学東洋アフリカ学院 (日本現代史) 講師  
著書に *Gender Struggles: Wage-earning Women and Male Dominant Unions in Postwar Japan* (Harvard University Asia Center, 2009) など。

トム・ギル (Tom Gill)  
明治学院大学国際学部教授。社会文化人類学者  
著書に *Men of Uncertainty: The Social Organization of Day Laborers in Contemporary Japan* (SUNY Press, 2001) など。

ウォルフラム・マンツェンライター (Wolfram Manzenreiter)  
ウィーン大学東アジア研究所日本研究センター主任研究員  
グローバル化する世界におけるスポーツ、大衆文化、テクノロジーと労働に関する著作など。

ミッシェル・メイソン (Michele Mason)  
メリーランド大学カレッジパーク校准教授  
論文に *Writing Hiroshima and Nagasaki in the 21st Century: A New Generation of Historical Manga* (*The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*, November 2009) など。

スーザン・ネイピア (Susan Napier)

タフツ大学 (日本研究) 教授

著書に *Anime from Akira to Howl's Moving Castle* (Palgrave Macmillan, 2005)、*From Impressionism to Anime: Japan as Fantasy and Fan Cult in the Mind of the West* (Palgrave Macmillan, 2007) など。後者は『現代日本のアニメ——「AKIRA」から「千と千尋の神隠し」まで』(中公叢書、2002)として邦訳出版。

ルーク・ロバーツ (Luke Roberts)

カリフォルニア大学サンタバーバラ校 (日本近世研究) 教授

著書に *Mercantilism in a Japanese Domain: The Merchant Origins of Economic Nationalism in Eighteenth-Century Tosa* (Cambridge University Press, 1998)、*Japanese Fisherman's Coats from Awaji Island* (共著、UCLA Fowler Museum of Cultural History, 2001) など。

ジェニファー・ロバートソン (Jennifer Robertson)

ミシガン大学 (文化人類学・美術史) 教授

著書に *Native and Newcomer: Making and Remaking a Japanese City* (University of California Press, 1991)、*Takarazuka: Sexual Politics and Popular Culture in Modern Japan* (編著、University of California Press, 1998) など。後者は『睡る帝国主義——宝塚をめぐるセクシャルポリティクスと大衆文化』(現代書館、2000)として邦訳出版。

## 第4章

# ヒロイズムの後に

——真の兵士は死ななければならないのか？

After Heroism: Must Real Soldiers Die?

サビーネ・フリューシュトゥック

Sabine Frühstück

戦争は発明にすぎず、生物学的必然などではない。

マーガレット・ミード

二〇〇六年、陸上自衛隊隊員が二年半に及ぶ「イラクでの歴史的な任務を終え、全員無事に帰国した」ことが日本の新聞各紙で報じられた<sup>①</sup>。一九五四年の自衛隊創設以来、戦闘地域へ派遣されたのは、戦闘行為をともなわない人道支援の任務であったとはいえ、これが初めてのことであった。イラクへの自衛隊派遣で日本は国際社会における存在感を高め、最大の同盟国アメリカとの結束を強めることとなった。日本は今回のイラク派兵によって、かつてマッカーサー元帥が指摘した「未熟な国家」から「一人前の国家」「普通の国家」に脱皮し、武装部隊が「本物の軍隊」になりつつある、と海外メディアは論じた<sup>②</sup>。湾岸戦争で財政支援のみに留まったことに対し、特にアメリカから厳しい批判に晒されたことに応えてという意味合いも一部にはあったのであろうが、日本国内でもこの普通という考えに同調する識者は、

少なくとも一九九〇年代以降は増加傾向にあった。この「普通の国家」という概念には、武力行使する用意がある国家

と、男性個人の戦闘能力を土台とする軍人の「男らしさ」との直接的かつ密接な繋がりが暗に示されている。換言すれば、近代の軍隊におけるヒロイズムには戦闘における殺戮と死が潜む。しかし近年、多くの研究者が主に二つの方面から、この「普通の国家」という概念に異論を唱えてきている。一つは、この概念が必ずしも普遍的に近代国家に当てはまらないということ、そして、冷戦終結以降はその勢力圏が飛躍的に狭まっているという点だ。

日本の自衛隊はこうした新たな研究成果に光を当てて一方で、複雑な一面を浮き彫りにしている。日本では、憲法九条および自衛隊法や各種の規制により、他国ではおそらく普通と考えられている軍務におけるヒロイズムと死との結びつきが分断されている。憲法九条は次のように記している。「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」<sup>3)</sup>。第九条は国家と軍の男性、女性隊員の潜在力を互いに強め合う仕組みを強制的に断ち切り、隊員が自らの軍人としての男らしさと国内状況や国際的状况、歴史的な状況との折り合いを付けるに際し、まったく異なる枠組を作りだした。日本の自衛隊は戦争を禁じる国家の名の下に任務を遂行しているわけだが、そこではさまざまな複雑な矛盾を体現する隊員が生みだされてきた。彼らは、自分たちが所属する組織を違法と宣言する国家の下で働き、時には自らの命を危険に晒す。憲法は市民生活での暴力を禁じる一方で、自衛隊は暴力的行為を想定して隊員を訓練している。基本的には、自衛隊は戦闘能力を用いずに済むように戦闘訓練を行い、戦争が起らないよう有事に備えながらも、最終的には不要なままでい続けることが成功の証となるのである<sup>4)</sup>。したがって、軍人としての男らしさという多くの社会で確立されてきた定義、すなわち男性であることの自己証明と組織的殺戮の成功によつて男らしさが証明されることとの近代における関係性は、日本では廃れたように見受けられる。こうした状態が過去六〇年以上にわたり近年における日本の歴史の特徴となつてきたにもかかわらず、社会で「本物」の男として、国際社会で「普通」の国家として正会員と認められるかどうかは、武力行使可能な軍隊を持つだけではなく、有事に行使する意思があるかどうかにかかっているという考え方が、日本の軍隊の潜在的な役割をとりまく国内外の議論にいまだに根強く残る<sup>5)</sup>。

本章では、国家の正常な状態とはなにか、自衛隊の潜在的な力、隊員男性の男性性に絡み現代が抱える不安に関連する学術的・組織的・社会的行為の再発見が試みられる。そして、日本国家とその軍の普通さについてのそれらの不安が、個々の兵士の「普通の兵士」「本物の男」に対する考え方に及ぼす直接の影響について考察する。もつと大きく言えば、フランスの哲学者アラン・バデュによる「いつたいこの混沌とした世界において、新しいスタイルのヒロイズムのため場所は存在するのだろうか。宗教、または国家の犠牲者という古き姿への回帰でもなく、失われつつある種族の未裔のニヒリスティックな姿でもない英雄像を、いかに探すことができるのだろうか」という近年の問いかけを念頭に置きながら、軍隊という世界での主観性の文化的形成に改めて疑問を投げかけていく。この後明らかにされるように、日本の兵士は多くの点でこうした一連の疑問を体現して生きている。

軍隊の規則や価値観、利害関係に生じる男性自衛隊員は、戦闘訓練を施しつつも、暴力行為を禁じた任務に限定的に従事させる軍隊組織の複雑かつ矛盾する要求の中で、自ら思い描く兵士像といかに折り合いをつけるか、という実存的な問いを常に抱えてきた。日本の自衛隊員は、プロの隊員としてのアイデンティティを構成する自らの行動、経験をどう語り、「普通」で「本物」の兵士について抱く自らの考えにどう近づけていくのだろうか。「本物」の「普通」の兵士になるために、どのように軍人としての任務を遂行すればよいのかということに対して、彼らはおそらく世界中の兵士で最も、そしてかつての日本兵よりも明らかにずっと不安に駆られており、多くの場合、彼らは自らの（訓練された）戦士でありながらも（実践面では）人道主義者、救護者、エンジニア、建設労働者、雑用係というカモフラージュされたアイデンティティを痛いほど自覚している。

ここでは、日本の自衛隊員が「普通の国家」という概念にまつわるさまざまな矛盾の中で、軍人としての男らしさにとどくように対峙しているのかを検証していく。各隊員は「本物」の軍人らしさと男らしさを体現しようと試みながら、相反する「普通」（の国家と軍隊）の意味合いに日々の生活のなかでどのように対処しているのだろうか。彼らは自分たちの受ける戦闘訓練（打撃をもたらして抵抗してくる究極的な形の組織的暴力に対しての）と人命を救うためのリスク（実際の任務上求められることになる）との間の緊張関係を、どう処理しているのだろうか。

## 飼いならされて

この緊張は、実際に戦闘と接触の可能性のある任務を遂行する兵士の姿勢に、とりわけ明らかである。第二次大戦後、若者が自衛隊に入隊を志望し、何を期待したかはその時代によつて異なるが、隊員の一拳手一投足は、男らしさの概念と伝統的に結びついてきた暴力に頼らず、どうすれば「普通の兵士であること」を体現できるかについて不安を抱いてきたことを証明してきたといえる。一九二三年の関東大震災以降はじめて、日本を最も壊滅的な状況に陥らせた一九九五年の阪神・淡路大震災以後、自衛官たちは勇敢な血の手柄ではなく、将来の自衛隊幹部として災害救済に尽力し、感謝されることを夢見て防衛大学校に入学したのである。国内の過酷な訓練と頻繁な被災地への派遣にもかかわらず、自衛隊の低い社会的地位に不満を持つ定年間の五一歳の男性自衛官は、隊への世間からの一定の承認と「日本の労働者なら誰もが期待できる認知」を切望する。また別の少佐は、自分の業績と、戦後を通じ自衛隊が果たしてきた役割に対する満足感を示しながら、定年まで何も起こらないことを祈ると、弱気な笑みを浮かべていた。それは戦闘経験を切望する男の願いとは言い難い。男性の新隊員の一人は、死、あるいは任務遂行中に死に至ることに對する彼の意見についての質問を退けながら、自衛隊が軍隊であることさえも認めようとはしなかった。「分隊の母」としての地位に誇りを持つ司令官もいれば、男性の自衛隊員たちが「国家のための自己犠牲」という概念をきちんと伝授されていない<sup>(8)</sup>ことに對する苛立ちを隠せない者もいた。

自衛隊に入隊すると同時に、男らしさを象徴する連続体に自らを位置づける男たちは、入隊や隊に留まるさまざまな動機を述べる際に、戦後日本の覇権的な男らしさを象徴する上で、最大のライバルでもある「サラリーマン」あるいはホワイトカラーの労働者を、必ずといってよいほど引き合いに出している。大正時代の日本に、兵士とは相反するものとして出現し、軍隊の比喩を借用する企業社会に属するサラリーマンは、自衛隊員たちによつて、彼らの引き立て役として使われ続けている。隊員の語りに現れるサラリーマンは、単一のアイデンティティしか持たず、そのため軍隊外の



すべての男性を見えない存在にしている。サラリーマンとは、隊員自らがそうではない、あるいはそうありたくはないと思うすべてを意味するのだ。このようにして、嫌悪のレトリックによつて、男らしくなく自己中心的であり弱い存在としてサラリーマンは引き合いに出されることとなる。サラリーマンの人生は「単調」で「退屈」である。うえに、利益を上げることには追いたてられるものと特徴付けられる一方で、軍隊社会の範囲内ではあるが、隊員は、無私、個人主義、精神の独立を有する者として参照され、両者は実に明確な対比をなしている。

サラリーマンを望ましくない男性像として拒絶しながらも、兵士生活はサラリーマンの現実と、それほどかけはなれてはいない。二五歳の新隊員は大学卒業後の数年間釣具店で販売員として勤めた後、結局その仕事を退職して自衛隊に入った。彼は「来る日も来る日も決まりきった販売の仕事にうんざり」し、「一日中屋内にいななければならないのがひどく嫌だった」うえに、「この先三五年ほどまったく同じように毎日を過ごすと思うと耐えられなかった」という。多くの同輩と同様に、身体能力を活用して、彼は野外演習や刺激的で過酷な訓練に参加し、この専門職に所属し続けるかぎり、自らに挑戦し続けることができるという期待を強調していた。店員の退屈な日課を語ったこの自衛隊員は、皮肉なことにはわずかな運動量と同じ動作の繰り返しである迫砲撃訓練に午前中ずっと取り組んでいたのであるが、彼自身はそのことには気づいていないようだった。この数週間、他の八〇〇人の隊員と共に彼は規則どおり定刻に起床し、軍服を纏い、食事をし、就寝するという生活を送ってきたのだが、彼が本当に自衛隊を生涯の職とするならば、残りの人生の大半をそうして働き続けることになるだろう。

将校クラスの自衛官は、他の男性隊員たちと「野外に」いることが主要な関心事項であつたのにもかかわらず、実際は事務作業に費やさねばならない時間が多すぎると感じている。彼らは「あれほどの訓練を受けても、結局はサラリーマンと同じ生活さ」と、否定的なコメントのなかに失意を滲ませている。自衛隊は「軍隊として尊重されたい」ので、「隊員として働くことはサラリーマンに成り下がること」だと考えている者もある。その一方で、隊員であるために、少なくとも「サラリーマンのように遅くまで働いて会社への忠誠を証明し続ける」必要がない現状に満足している者もある。



図4-1 他の多くの広報資料と同様、この二〇〇五年の自衛官募集のポスターは民間人の中流階級的な体裁をとっている。ポスターには「求めています、若い力を。つなぐたい未来がある。助けたい人がいる。守りたい国がある」と書かれている。

ジェニファー・ロバートソン撮影

サラリーマンは隊員のアンチヒーローの役割を果たしているが、その反面、自衛隊は明文、不文律の規則によって隊員ができるだけサラリーマンに見えるように、あるいは少なくとも主流の社会の中に溶け込んで見えるように、服装規定、髪型、ふるまいを細かく管理している。広報官は男性支配型の日本企業、政府関連機関、あるいは、およそ組織ならどこでも見られる普通の男性(女性)によって構成される組織とほぼ同じような自衛隊の「サラリーマン化」を追求する一方で、きわめて特殊な組織で働いているというイメージを流通させている。数十年にわたり制作されてきたポスター同様、二〇〇五年の自衛官募集のポスター(図4-1)もこうした試みを明白に示している。二人のハンサムな青年と一人の女性。女性はホワイトカラーのライフスタイルを想像させるカジュアルでおしゃれな服を纏い、写真の中で微笑んでいる。実際に下士官として自衛隊に入隊する隊員は、ポスターに描かれた中流階級の男女のイメージとは裏腹に、社会的経済的に恵まれていない生い立ちの者がほとんどである。幹部自衛官(その多くは防衛大出身である)でさえも、入隊の動機が自衛官候補生として提供される経済的な自立や、防衛大の受験のきっかけが他大学の受験の滑り止めであったことなどを認めている。

隊員の語る入隊動機にサラリーマンが際立って登場することは、他の理由からも皮肉に映る。一九九〇年代初頭の景気後退と並行し、その死を宣告されるまで、サラリーマンは自衛隊員が軍人としての男らしさのアイデンティティを形成する際に、重要な役割を担ってきた。一九八〇年代の日本内外の有力なメディアや広告産業での栄光を最後に消え去った「企業戦士」としてのサラリーマンは、第二次世界大戦後の日本のヒロイズムの偉大なプロトタイプであった<sup>10)</sup>。企業に対する完全な献身を描くなかで、戦闘、勝利、敗北、死といった用語で大衆文化に対

して表象されたサラリーマンは、戦時中の戦士の平時の化身という、ホワイトカラーの理想的なイメージとなつたのである。それゆえに、一般社会において、戦闘用語が多く、戦闘用語が多くの隊員が自分たちのアンチテーゼと見なす戦士像——サラリーマン、あるいはホワイトカラー労働者——と関連付けられているという事実は皮肉なことだ。

サラリーマンによつて喚起される戦士という概念は近代的な戦争から切り離され、日本史上の侵略と敗北という不快な記憶にも汚されないままである。世俗化し商品化された「二一世紀のサムライ」が戦うのは、戦場ではなく職場においてである。彼の忠誠心は一族ではなく企業と結び付いている。しかし世間の一般的な見解に発信される扇動的な広告の言語から察するところ、その軍人的男らしさの精神には未だ変化はみられない。

## 国際化のなかで

アメリカの尻ぬぐいだな。個人的にはアメリカは嫌いだよ。だが、俺は「自衛官」として「職務」として任務を遂行する。俺がもし行くなら部下を絶対に死なせない。これが幹部の任務だと思うよ。それに俺たちは言われたことをやらなければならない。この国は敗けたんだからな。

陸上自衛隊将校 『自衛隊のイラク派兵』より引用

自衛隊員の中には、憲法の制約は殺人以上に価値ある仕事ができる隊員の能力を際立たせていると指摘する者もいる。だが一方で、この制約のため、自分たちの仕事生活は欠落、逸脱し、障害を持つてしまつていと表明する者もいる。これらの感情は、先の引用が示すように、すぐ近くで日本に駐留する米兵との直接的な接触において痛感されるのである。米兵の存在は、未だに日本を負かし服従させた米軍を連想させるのだ。それと同時に、米兵は軍事組織の（架空の）「国際的共同体」との望ましい繋ぎ役としても機能する。R・W・コンネルは別の種類の障害と行動不安に目を向け、「男らしさが身体的能力を通して構築されるならば、能力を維持できなければジェンダーはぜい弱なものとなる」<sup>(1)</sup>

と指摘する。自衛隊員の場合には、たとえ行為が維持されていても、ジェンダーは脆いものとなる。より広い観点からこの問題を掘り下げると、国内の合同演習で米軍と接触する機会を持ち、さらに災害救助や平和維持活動において国際的な軍隊組織と遭遇することで、兵士であることの主体性に広がる不安は、たとえばクリフォード・ギアーツが（バリ島の闘鶏に関して）「地位に対する関心の演劇化」と呼び、アーヴィング・ゴッフマンがかつて「地位の大殺戮」と呼んだ現象を引き起こすのである<sup>12)</sup>。つまり、ここで危機に晒されるのは隊員の命ではなく、評価、名譽、威厳、尊重、つまるところ兵士としての地位である。このような機会において、米軍や世界の他の軍隊組織と向き合う中で、自衛隊の特有の地位が確認される。たとえば作戦行動において、アメリカと日本の隊員の地位の不均衡は顕著というほどではないが、それでも日本の隊員にとつては苛立たせる程度のものである。ある陸上自衛隊少佐は、米兵が「戦争を起こす本物のプロ」であることを是認する一方で、米兵が現地の民間人を危険に陥れたと非難されることのないよう、自衛隊が米兵の放置した弾薬などの危険な武器の破片の回収などを請け負わなければならないことについて触れながら、苛立ちを隠せないようであった。また、自衛隊は隊員自身や民間人を、自衛隊所有の装具による自殺の危険に晒すこともできない<sup>13)</sup>。

日本とアメリカの隊員間の不平等な力関係は、基地の外での彼らの接触の際にも現れる。二〇〇四年八月、米海兵隊のヘリコプターが沖縄の普天間基地近くの大学キャンパスに墜落した際には、瞬時に米軍に対する抗議に火がついた。アメリカ人の指示に従って墜落現場で走り回る自衛隊員の姿を目撃し、反自衛隊デモに参加する者もいた。デモ参加者から聞こえた「本土に帰れ」という叫びは、米兵がその場（暗示的に沖縄）を占領し、支配しているという事実だけではなく、大日本帝国陸軍が沖縄の人々を見捨て、彼らに自決を強要したうえで敗戦の数カ月前に本土へと撤退した記憶をも蘇らせたのだ<sup>14)</sup>。

最近では「最初に撤退を公言する国になることだけは何としても避けたい<sup>15)</sup>」という理由から、イラクからの帰還日程を決めるといふ難題に日本政府が取り組むなかで、アメリカと日本のヒエラルキーが明白に映し出された。アメリカに対して日本を劣位に置く二国間協定の枠組みのなかで、イラク派兵は日本国家と国家組織内の軍隊の地位にとって大きな象徴的、政治的意味を持った。しかし日本の隊員にとつて、イラクでの任務は第二次世界大戦後の日本の軍隊に内

在している葛藤——アメリカへの服従と他の軍事組織とは異なっているという総体的な感覚——を何より際立たせ、白日の下に晒すものであった。これらの緊張はそもそも初めから隊員に内在し、兵士として、プロとして、さらに男としての主体性を常に問い直させるよう働き掛けてきた。個々の隊員はこの不平等な関係を体現することとなるが、同時にそれについて批判的に考え、ときには抵抗を示すこととなった。

今日、自衛隊員が米兵と直接的に向き合うことになるのは、日本や米国で行われる合同演習においてである。演習は価値の定まった兵士像を議論し、その普遍性を試すための重要なレンズとして機能するのである。米軍とこのように対面する場を持つことにより、隊員が細心の注意を払いながら培ってきた、戦士というよりは支援者、救済者であるという軍人英雄像は大きく揺らぐこととなる。この問題は次節でより詳しく扱うので、ここでは日本の隊員が想像する「米兵」という概念が、サラリーマンのイメージと同様、矛盾と緊張を伴うものである点に留意することが肝要である。ある者にとって米兵はより魅力的な軍隊を人格化したものであるが、他の者にとっては永遠に骨抜き状態にされるという脅威に映る。これらの国際的な任務は、単に不平等な力関係を白日の下に晒す場として留まらない。それどころか、こうした任務への参加は日本の隊員にとってある種の「感情教育」としても機能するのだ。この任務は日本軍と米軍の間のジェンダー化された力関係を生産・再生産するだけではなく、この関係にまつわる繊細な感情を生み、維持する積極的な因子ともなる。再度ギアーツの論を借用すれば、この感情の中核にあるのは一連の不安である。日本における軍隊の秩序や意義の脆さに対する不安は、世界の日本に対する不安をも反映している<sup>16</sup>。

米軍に関する矛盾した感情のもつれは、日本の第二次世界大戦における敗北と、その後の占領期、日本に民主主義を教えてくれるだろうという期待のなか、アメリカ人に対する信頼が飛躍的に高まった時代にまで遡ることができる。

この服従姿勢とその拒絶は、沖縄の米軍基地撤去を求める左翼の市民運動から、日本遺族会と提携した修正主義組織である「英霊にこたえる会」のような極右組織の政治表明に至るまで、政治の全領域に浸透し、市民運動の中に長く燻っている。彼らの政治的な目標や、現状より望ましいと考える国家像は根本的に異なるが、靖国神社に貼られた祈り「いつの日か日本人がこの国を支配できますように。日本国民」に表現されている気持ちを共有しているのである。

日本の隊員の内面では、イラクのスポーツスタジアムを含むインフラ建設と再建を支援し、台風で流された遠隔地の道路を再建設し、阪神・淡路大震災のような自然災害後に瓦礫を選び分けて生存者を捜索し、ホンデュラスで疫病発生を防ぐために道路を殺菌する軍隊という自己認識が、米軍と並列して置かれている。かつて戦闘員によって具現化された理想の兵士像は、今日においては、これらの人道支援任務を成功させることができるのは自衛隊だけであるという自負と主に結び付いている。隊員が抱く米兵についての見解は、実際の在日米兵のイメージと、単一的で画一的なジェンダーのプロフェッショナルな模範的な軍人像となる、典型的なアメリカ男性のイメージとが混在する傾向にある。たまた米兵の多くが非白人であっても、米軍の兵士集団内の多様性は不可視な状態にされ、男性白人戦闘員に包括されてしまう。この米兵の均質化と単一化は、以下に見られるようないくつかの重要で広範囲にわたる論証的な影響力を有している。まずは従来の戦争を起こす軍隊とは一線を画す、日本の自衛隊員が主張する軍人らしさ（そして男らしさ）を促進させる。次に、日本がユニークであるという固定観念を自衛隊の境界線を越えて助長させる。さらに諸外国の軍隊組織の多様性を総合的に理解するというより、単一の規格化された軍隊像の確立を促している。

今日、自衛隊員は（虚構性の高い）米軍という概念を一つの基準として、自分自身の組織、プロ意識のレベル、兵士としての真価が及ぶ範囲といったものを測っている。一方で、米兵は国際的な安全保障の世界への繋ぎ役としても機能しているのである。「国際主義の女性」がアメリカの白人男性を「ある種の国境を越えた社会的上昇志向と結びつける」見方や、日本人の「グローバル社会」参入への切望が投影される崇拜の対象と見るのに似て、日本人隊員にとって在日米軍と想像上の米軍は、「普通」の軍隊組織の世界への参入を約束するものとなる。自衛隊員にとって、米兵は軍人の規範を表象するものであり、隊員は米兵を、国際領域で尊重され、完全に合法的な軍隊組織と認めるのだ。<sup>115</sup>

アメリカに対して日本を従属的な地位に置く安全保障同盟に基づいた米軍との連携は、主に合同演習という状況において自衛隊員に相反する感情を強く抱かせる。ある隊員の目には、アメリカの部隊は戦闘経験、国際的な安全保障共同体とのつながりを通して得ている権力、そしてその中における卓越した能力によって、軍人のプロ意識を体現しているように映る。一九八四年の初の日米合同演習以来、このような演習が毎年日本とアメリカの両国で実施されてきた。二〇

○年だけでも自衛隊は二一回の合同演習に参加している。自衛隊員は在日米軍に寄せる多大な敬意について述べ、彼らが真剣に訓練に取り組んでいる姿を目の当たりにすることで、彼らを「本物のプロ」と賞賛することもある。しかし日本の隊員は時として米兵の男らしさを否定的にも見ている。米軍は日本、とりわけ沖繩において、自動車事故、暴力犯罪、レイプといった無謀な犯行に及ぶ者としても見られているのである。そうした犯罪に対しての責任は日本の法廷では問われず、仮に問われても不承不承である。自衛隊と米軍が世間の目には一体となっており、さらに自衛隊が米軍から民間人を守れなかったことに對して責めを負うこともあり、米兵の行為に対する責任のいくらかが常に自分たちに向けられることに隊員は気づいている。

自衛隊員の目には、米軍は典型的な西洋の軍隊として映っている。日本の若い自衛隊幹部は、米軍男性の尊大な態度と自信に満ちた振る舞いが示唆するように、より広い社会における米兵の単純明快な地位に羨望を抱いていると言及する。また、米軍が象徴する単純明快な軍国主義への仲間入りをすることを願っている。しかしそれと同時に、彼らはその世界に編入されるためには、憲法の枠組みを超えなければならないことや、特に陸上自衛隊においては、自己認識の核として、重々しく、過剰なまでに意識している前任者の大日本帝国陸軍からの遺産を打破することによってしか達成できないことに気づいているのである。

## ● 歴史化

自衛隊と大日本帝国陸軍との歴史的なつながりは、隊員が「普通の兵士」と軍人ヒロイズムが何であるかを考える際に、常に不安を与え続けている。この動揺は彼らの言語使用の中に顕著で、彼らが使用する用語はかつての大日本帝国の組織、特に大日本帝国陸軍の言語と関連の可能性のあるものすべてを断ち切るよう、改竄されてきたのである。<sup>18</sup> キャロル・コーンはアメリカの国防専門家の用語は「使うのが面白い」間接表現に満ち、それらが「きびきびして、セクシーで、威勢がよく、まるで機関銃を連射するかのように、ぽんぽんと飛び出してくる。素早く、すっきりして、軽

妙で、するりと口をついて出る。次にどう言葉を繋ぐのかを考えることもなく、その背後にある彼ら生活のことさえも気にもとめずに、あつという間に淀みなくまくし立ててしまう」と指摘している。<sup>19</sup> 対照的に日本の軍隊の間接表現は扱いにくく、長つたらしく、官僚的で、客観的な響きを持つている。もたもたしており、話し手は舌が絡まってしまふ。ややこしいので民間人にはわかりづらく、それゆえ大日本帝国陸軍と自衛隊との明らかな関連性を断ち切ろうとした当初の意図は挫かれてしまふ。さらにこの間接表現が一連の「自己のテクノロジー」とでも呼ぶべきものを形成すること、日本の兵士は自らの身体（散髪や動作）や自分の精神（自己認識）、さらに自らを作り変えて修正できる行為に加担することとなるのだ。<sup>20</sup>

このように細心の注意を払いながら断絶を試みたとしても、国際的な活動が議論に上がる際には、帝国兵は必ず隊員の心のなかに立ち現れるのである。この理由はまさに、これらの活動には、抑制された男らしさの中にある危険、ヒロイズム、犠牲など、独立後の一時期に日本の国力を高めた象徴が詰め込まれているためだ。彼らへの取材ですぐに明らかになったのは、実際に隊員の心にある帝国兵は影ほどの存在にすぎず、従うべき模範としてではなく、「アイデンティティを語るのに便利な」風刺的存在として呼び起こされるのである。<sup>21</sup> 帝国の過去が見せる、仮に失敗だったとしても、犠牲的なヒロイズムのイメージに合わない要素は、消されるか抑制されなければならないのである。ここでは自衛隊員に、大日本帝国陸軍とは行動において相反するものでありながら、大義への献身という精神においては繋がっている自己を形成させる要素が強調されるのである。

帝国兵は修辞上、二つの方向に利用される。自衛隊員は災害支援、または海外での平和維持活動で進んで引き受ける危険を、前任者がかつて犯し、そして現在の隊員が思い浮かべる暴力と差異化し、かつ比較するのである。この図式において、帝国兵は、攻撃、侵略、戦争、破壊、死、大量殺戮を表象することとなり、対照的に自衛隊員は、危険に対処することを託されたものとして自己を認識している。それは神戸近郊で起きた一九九五年の震災後に数千人が携わった任務の時のように、自然災害という現場で市民のために冒す危険かもしれない。あるいは一九九二年のカンボジア派遣や二〇〇三年から二〇〇六年にかけてのイラク派兵の時のように、それ以上の紛争を現地において回避し、平和を維持



するために冒すものであるかもしれない。

男らしさという観点からみれば、大日本帝国陸軍から自衛隊への移行は復活ではなく、新たな抑制された男らしさ（ドイツ陸軍の「抑制された軍国主義」に呼応する）を誕生させた改鑄<sup>(2)</sup>だった。大日本帝国陸軍の軍人は時代のイデオロギーに従って戦闘、及び殺戮行為を遂行し、「大日本帝国」のために命を落とした。自衛隊員にとって自分の命を犠牲にするという意志は、「社会」のために多くの仕事を請け負うという人道的理想へと変えられている。暴力を加えることから危険を冒すことへと再定義された軍人の男らしさは、自衛隊員の現在の軍事行動の根底をなしている。すでにみたように、殺戮行為が禁止されている状況というのは、軍人からは逸脱しているという、相反する見解との間に緊張を孕みながら、危険の回避が命じられるのである。自衛隊士官は、ときの声を上げるのではなく、「自分の命と他者の人格と命を重んじ尊重する」ことを期待されるのである。またPKO協力が暴力的で危険な状況に陥れば自衛隊に撤退の要請が下るといふのも、その一例である。国際的任務はあくまで任意である。たとえば数人の隊員がイラクでの任務を「義務」と呼んでいたとしても、家族や他の理由で派遣を拒否することもできるのである。したがって、たとえ同じ隊員が他者の命を脅かすのではなく救うことを試みたとしても、軍事化された男らしさについての隊員の考えは、自らの安全と幸福が危険にさらされているという行為のうえで成立するのである。彼らは国際的任務を戦闘員の最前線の経験に代わる最良の選択肢としてではなく、戦闘とまったく同一視しているのだ。少なくとも隊員にとって、戦闘は何の本質も有していない。

隊員の行動様式だけではなく、彼らの言動や思いのなかに垣間見られる軍人ヒロイズムは、危機と結びつく可鍛性があり、かつ人為的に構築されたものである。自衛隊の内外の両方において日々自らの役割とアイデンティティに折り合いをつけながら、隊員は常にさまざまな種類のヒロイズムと一般的な兵士像の間を行ったり来たりしている。自分自身の「軍人ヒロイズム」を達成しようと奮闘するなか、劇的に歪められた大日本帝国陸軍の兵士像にノスタルジーを覚えたり、逆に完全な嫌悪を向けたりすることで、彼らは歴史的な意味を持つ軍人としての男らしさ像を再構築し、定着させようとしているのである。

新たなヒロイズムを定義し、自らをうまく重ねようとする苦闘は、軍人ヒロイズムが死と隣り合わせで、真の英雄は死すべきものであるという古い考えに未だ屈服したままである。ところが隊員のなかには、天皇のために殺戮行為に及んだり、あるいは命を捧げたりするより、民間人のために命の危険を冒すことのほうが新たなヒロイズムに至る魅力的な道だと考えている者もいる。しかし切り離しは少なくとも二つの点で不完全なままである。第一に、任務に関する語りは、犠牲と生存という論理の枠組みに相変わらず結びつけられている。たとえば子どもたちへの医療提供、自然災害の犠牲者救助、インフラ再建といった注目を浴びる災害支援や平和維持活動への参加は、個々の兵士のキャリアを高める。それゆえキャリア志向の隊員には、これらの事業への参加は特に魅力的なものに映ることとなる。また個々の兵士の典型的な語りのなかでは、これらの国際的任務は最前線の経験としても一役を担い、さらに国家のアイデンティティという概念の中に暗示されるのである。

第二に自衛隊員が国際的任務に志願するのは、戦争が自分と社会を変えようと思ひ描いた大日本帝国陸軍の理想主義者にも似て、自身にとつての本物の経験を切望するからでもある。事例として、海上自衛隊の阿部進（仮名）一佐の場合を取り上げるが、彼は経験の重要性は誇張ではないと語る。阿部は一九九三年から九五年にかけて国連が介入したモザンビークで平和維持活動任務に六カ月間携わったが、その仕事は彼の職歴の中でも最も心をかき乱されるような嫌なもので、深い印象を残す経験となった。彼や彼同様の経験を積んだ者は実際の経験を積んだ人材として尊重される。ある種の純正の経験を持ちたいという願望は、任務の目的が正確に何であるのか、あるいはその任期中に彼らがどのような任務に携わるのかということに隊員があまり重きを置かないことに、明白に示される。これらの話は兵士が男になる道のりを形作り、さらによく言われることだが、軍隊が隊員を男にする際の手段となることを示している。ヒロイズムについての日本の隊員の話から、組織としての軍隊や日本国家と同じく、彼らも大人への通過儀礼として自分たちの活動を捉えていることがわかる。

語りが描き出すように、兵士のヒロイズムは戦争不在の自衛隊のなかで生き続けてきた。一方でその意味は劇的に変化し、天皇とお国のために命を差し出すという理想は、公共のために命の危険を冒すという理想にとつて代わられた。

ヒロイズムの物語は語られ、そして語り直されている。だがこのヒロイズムが帝国軍における兵士の時間と経験から借用しているものは、その論理の脱け殻に他ならない。結局、大多数の日本人は、エドワード・ラトワックが「ポストヒロイズム」文化と呼ぶものなかに生きており、あるべき男らしさと、かつてあたりまえのように等号で結ばれていた軍人の暴力を、もはや受け入れようとはしない一般市民から成っているのである。隊員を含めた大半の日本人は、戦後から現在にいたるまでこの等式を拒絶してきた。自衛隊のイラクでの経験が、この拒絶の立場に劇的な変化をもたらさないことが暗示されるのは、国際平和維持活動に動員された兵士が、現代の一般的な国家間の戦争における兵士よりも山火事で活躍した(軍人)ヒーローとの共通性の方が多いからに他ならない。両者とも命の危険を冒すにせよ、どちらも国家のための殺戮行為や、死を望んではないのである。

自衛隊の三つの部隊の違いは別として、東京にある幕僚学校の軍人学者である教官は兵士の身分と地位が疑問視されることもなく、その役割が紛れもなく明確であり、憧れの軍人としての男らしさが自分の命を進んで捧げるという意志のみによつて定義される、そんな単純な時代として、帝国の過去に憧れる隊員がいることを認めている。しかし多くの兵士にとつて帝国時代への懐古はそこで終わる。軍事学習での第二次世界大戦における日本の役割に対する支配的な意見を踏まえ、彼が述べたところによると、一九五〇年代後半から一九六〇年代にかけて、大日本帝国軍に在籍していた退役軍人はまず排除され、やがて選抜されて自衛隊に組み入れられた。この対応により、旧日本軍と自衛隊とのつながりができてしまったわけだが、当時機能的な軍隊を創設するため、このような人選は必要な処置であると考えられたのだ。彼は、核心的任務である戦争に勝利することに失敗している大日本帝国軍を自衛隊のモデルとみなすことを、そもそも重大な問題とみなしている。「それが皇軍と自衛隊を関連づけ、自衛隊の歴史を統合できる肯定的な軍隊史と、隊員が信奉し、同一視できる兵士のモデルの両方を作り上げることが不可能にした理由である」と彼は論じている。

防衛省内の国際協力課長の一等陸佐は、「自衛隊にとつて国際的派遣は単に実践的な任務のなかで経験を積むためだけでなく、以前に日本の植民地下にあった近隣諸国に大日本帝国陸軍との共通点が皆無であることを知らしめるためにも重要である」と説明した。多くの士官の想像領域においては、「帝国兵」とは自らの命を犠牲にするという点では

なく、他者の命を救うために危険を冒す覚悟において、自衛隊員が軍人としての男らしさのアイデンティティを築く一つの礎を提供しているのである。帝国兵は軍人としての男らしさの重要な輪郭を見せるが、それは二面的で曖昧であり、隊員が格闘するものとしてあり続ける。常時平和であったこの軍隊にとつても、理想の男らしさを定義するための評価基準になるのは女性ではなく、他の男性なのである。<sup>20)</sup>

「本物」のあるいは「普通」の軍人のあるべき姿に何らかの点で及ばないということのないよう、軍人としての「男らしさ」を何とか具現化しようとする隊員の奮闘をもとに、三つの結論を導き出したと思う。

第一に、自衛隊はそもそも初めから他のほとんどの軍隊——特に顕著なのはアメリカの軍隊であるが——が最近その任務に加えるようになった、地域社会活動や災害救援、そしてPKO、つまり平和維持などの活動を任せられてきた。したがって日本の兵士には、軍事任務の世界規模での増加と多様化の縮図を見ることが出来る。アメリカ海兵隊の退役将校であり、アメリカ中央軍司令官を務めたこともあるアンソニー・ジニは、二〇世紀の戦争を特徴づけた「本物の軍務」の時代は終わったと考えている。ジニは米軍、さらに表面的には他の脱工業化時代を迎えた民主国家の軍隊の未来について明確に説明し、アメリカ軍事政策担当者は未だに「真の敵対する悪魔」がおり、それを見つけて壊滅、無条件降伏させなければならぬかのように軍事行動をとっている、と指摘している。彼は今後、軍事組織は環境災害への対応に加え、「人道的活動、被害管理、平和維持と平和執行に携わるようになるだろう」と、主張している。「本当のところ軍事紛争は既にその形を変えたのに、我々はなかなかその事実を認めようとはしてこなかった……国境を越えた脅威を打破したり、あるいは国を再建するといった雑多な仕事が必要になってきているのに、われわれは未だにそれに適応できていないのだ」とジニは示唆している。<sup>21)</sup>

第二の結論を論じるにあたって、本章の題辞にあるマーガレット・ミードの言葉に戻ろう。彼女はもし一九四〇年に今日の制度や感情と一致するような方法さえ発明されれば、戦争をなくすことができると示唆していた。戦争がよりよい発明に取って替わられるために、ミードは少なくとも二つの条件が必要になると考えた。それは古き発明である戦争

の欠陥の認識と、新しいシステムの創造である。そのような行為が実行の道筋として彼女が示したのは、戦争反対のプロパガンダと戦争の代償として人々が味わうこととなる苦しみと社会的損失の証拠を文書化することであった。ミードはこれらの戦略が、戦争行為が欠陥だらけの社会的慣行であり、社会的な発明は可能であるため、新たな手段の発明によつて、最終的には戦争行為が時代遅れのものになると人々に認知させることで、人々に行動基盤を用意すると考えた。しかし彼女は、ある行為が時代遅れになるのは、それが他の何かに取つて替わられる時だけであるとも警告している。このように戦争が陳腐なものになるためには、人々が新しい手段が可能であると信じなければならぬ<sup>(1)</sup>。七〇年以上の時を経て、いくつかの破壊的な戦争、大掛かりなプロパガンダ、そしてテレビ画面に映し出された記録など、これらの戦争に関する情報を経た後に至つても、ミードが一九四〇年に描いた瞬間がいまだに達成されていないことを我々は認めざるを得ないである。

第三に、軍人としての男らしさの意味と重要性は二つの点から歴史的なもの、つまり過去のものである。それは一九四五年の戦争行為者であつた帝国軍の消滅と、一九五四年の自衛隊創立との間の断絶のようなより大きな歴史的变化の影響を受けている。しかしそれは個々の自衛隊員の小さな歴史にも形作られている。これまで論じてきたように、日本国家とその軍隊の「普通さ」に関する懸念と不安は、隊員の中に困惑と葛藤を再生産している。彼らは「普通」そして「本物」の兵士とは何なのか、それぞれの義務を果たすとはどういうことかという点について、常に苦悶しているのである。おそらく兵士に広がる不安は、日本でよりはつきりと現れるだろうが、何もそれは自衛隊に限つたことではない<sup>(2)</sup>。結局、軍隊組織の構成員になることは、常に他の誰かになることを意味するのだ。多くの隊員の認識から、「軍隊の制服の機能の一つは、紛れもなく自分のものではない人格を装ふことである<sup>(3)</sup>」と、ポール・ファッセルは結論づけている。日本の隊員にとつて、軍隊における経験はフレドリック・ジェイムソンが「自我の分裂」と呼ぶものにも似ているようだ。ジェイムソンが大まかに説明するところによると、ポストモダンにおける自我とは「モダニスト的感觉にくむポスト主観性を奪い去られている」というのである。自我の無意味化あるいは「死」を想定する文化理論の趣旨をくむポストモダンの文化形態は、この薄つぺらな主観性を反映し、また同時に自我の認識不能感覚を強めることとなる。したがつ

てジェイムソンが示唆したであろうように、日本の兵士による軍人としての男らしさとの格闘は、個人的・集団的自我として自分たちの立ち位置を最終的に掌握したいと願う「認知的地図作成」の試みとみなされるのである。一方リチャード・セネットなら、後期資本主義に至ると、常に非難にさらされている一貫した自己を語る能力を回復する重要性を指摘したであろう。<sup>(15)</sup> これらの解釈のいずれもが、本論で簡潔に述べてきた不安と葛藤というものが、隊員や社会批評家が示唆するように、必ずしも軍隊や日本に限られたものではないことを暗示している。

日本に限らず、今や至る所で、一貫した自己を語る個人の能力の喪失が、自分自身を男として証明することとは組織的な殺戮への参加を意味するという現代の等式を消滅させることになるのかどうかは、今後さらなる考察が必要である。その間隊員をも含むほとんどの日本国民は、軍人の暴力の行使と普通の国家としての独立を結ぶ、かつて受け入れられていた等式を受け入れたくないという気持ちを共有しているのである。自衛隊への入隊者数は減少し、人口統計は兵役に適する男性の数が減少していることを示している。そして二〇〇五年以来、憲法改正を叫ぶ声は毎年小さくなり、憲法改正の可能性は再び事実上消えている。

二〇〇六年、サンフランシスコで開かれたアジア研究協会年次大会のパネルディスカッション『戦後日本における軍国主義復活』において、本稿の短縮版を提出した。同じくパネリストであったクリストファー・エイムズ、田中雅一、アロン・スキヤブランド、討論参加者のハリー・ハルトウーニアンからの貴重なコメントに感謝の意を表したい。本稿が現在の形になるまでには、アロン・ベルキン、トム・ギル、デビッド・レヘニー、ルーク・ロバートツ、ジェニファー・ロバートソンから貴重な批判と示唆を賜った。

[注]

(1) 『ジャパンタイムズ』は二〇〇六年一月二六日の記事に、“All GSDF Troops Safety Home from Historic Mission to Iraq”というタイトルを付けた。

(2) 二〇〇四年四月一四日付の『ファイナンシャルタイムズ』記事のタイトルは、「成人国家? イラク人質事件は国際舞台での日本の適切な役割についての議論を激化させている」、二〇〇四年一月一六日付の『ニューヨークタイムズ』記事のタイトルは「イラク派兵が日本を本物の軍隊に向かわせている」であった。

- (3) Inoue (1991, p. 275) 参照。その結果、国際平和維持活動の枠組みを提供する新しい法案に加え、自衛権もいまだに論争の只中にある。たとえば Pyle (2007) 「高等裁判所——航空自衛隊のイラクへの任務を違法とする」(二〇〇八年) Samuel (2007) は、大規模の保安上のチャレンジャーについて述べている。
- (4) たとえば、John Armitage (2003) は、アメリカでの戦争の民主化が軍人のカリスマ性の「日常化」をもたらし、カリスマ的ヒーローは大衆文化においても名声を持ち続けていると書いている。Chris Habes Gray (2003) はまた、「戦争」については非常に人気があるが、大抵の男たちは男らしさを定義する儀式としての戦争、あるいは兵役さえ、すでに放棄してしまった。米軍入隊の応募数が減り続ける一方で、模擬戦闘や準軍隊的グループは至る所に存在する。週末のゲームで迷彩服に身を包んだ男たちにとって、男らしさとは何をやるかではなく、「どう見えるかである」という事実を見出している(二二〇頁)。
- (5) Meyer, Boli, Thomas, and Ramirez (1997)。
- (6) Badieu (2007)。
- (7) インタビューの中で、自衛隊員が述べたこれら職業上の肩書きは、自衛隊と日本社会全体の中で、彼らが自らと、自らの役割をいかに認識しているかについて伝えている。たとえば Sheehan (2003, 11-23) 特記 p. 17) 'no one prevent (2001' 特記 p. 351) を参照。
- (8) 筆者との個別のインタビューは、一九九八年から二〇〇四年に行われた。
- (9) 筆者とのインタビュー、二〇〇三年七月。
- (10) Kimmonth (1981); Roberson and Suzuki (2002); Vogel (1963); 中巻・日置(一九九七); Osawa (1994)。
- (11) Connell (1995, pp. 54, 56)。
- (12) Geertz (1973 [1972], p. 437); Goffman (1961, p. 78)。
- (13) 筆者とのインタビュー、二〇〇三年七月。
- (14) 連合軍上陸と同時に帝国陸軍が沖縄から即時撤退した記憶は、日米両方の隊員による犯罪発生に関する議論を、頻繁に過熱させている。たとえば坂田(二〇〇二 [一九四二]) 'Angst (2003, pp. 135-57) 参照。
- (15) "SDF Still Looking for the Best Way to Make a Graceful Iraq Exit," *International Herald Tribune*, 20 May 2006.
- (16) Geertz (1973 [1972], p. 449)。
- (17) 敗北と占領の結果としてのアメリカ人男性に対する日本人男性の劣位は、戦後日本の学者が共通して観察してきたが、Kasay (2001) は、はじめてその継続性と、現代の日本においてもより広範囲に流布している点について指摘した。彼女は海外で多少なりともキャリアを積もうとする日本人女性は、典型的な西洋の白人男性と個人的、職業的、あるいは恋愛などを通じて関係を築き、国際社会に参入する際の足がかりにすることを指摘している。

(18) 広報活動資料は、保護と防衛の対象に言及する際に「国家」あるいは「日本」という言葉を避け、英語の「パブリック」を繰り返して用いている。この外国語の選択は、旧帝国陸軍と距離を取り、かつ他の政府機関や民間企業と提携しやすいように、自衛隊によって使われる先進的な技術とみなすことができる。広報活動言語に関するより広範な議論に関しては、Fritsick (2003, pp. 116-48) を参照。

- (19) Cohn (1987, p. 704).
- (20) Foucault (2007 [1997], p. 154).
- (21) Nye (2007, p. 437).
- (22) Nye (2007, p. 434).
- (23) ヒロイズムと犠牲のレトリック上の結びつきは、二〇世紀前半に強制的に促され、また大戦直後の日本再建に向けて再び使用された。他でも言及したように、大戦終結後国家的団結を強化するために採用されたイデオロギーの技術としての「ヒロイズム」と「犠牲」の連続性は、とくに児童書・雑誌に明らかに見てとれる。Fritsick (2007) 参照。
- (24) Ohnuki-Tierney (2002).
- (25) Mosse (1996, p. 111).
- (26) Sheehan (2009, p. 348).
- (27) 筆者とのインタビュー、一九九九年八月。
- (28) 筆者とのインタビュー、一九九八年九月。
- (29) Nye (2007, p. 438).
- (30) Urquhart (2004, pp. 28-33、特に p. 32)。「ジニの指摘を裏付けるように、米軍はハリケーン・カトリーナがニューオリンズを直撃した後の救済活動に現役部隊の派遣を提案している。」Schnitt and Shankar (2005, p. A13).
- (31) Mead (1940, p. 405).
- (32) Gray (2003, p. 216).
- (33) Fussell (2002).
- (34) Jameson (1984, pp. 53-92).
- (35) Jameson (1984, p. 54); Sennett (1992, p. 98); Orner (2006, p. 125).



## 【参考文献】

- 小西誠・渡辺修孝・矢吹隆史（二〇〇四年）『自衛隊のイラク派兵』社会評論社
- 坂田喜代（二〇〇二〔一九四二〕年）『女の見た戦場』まろ
- サビーネ・フリューシットウツク著 花田知恵訳（二〇〇八年）『不安な兵士たち』原書房
- 中牧弘充・日置弘一郎編（一九九七年）『経営人類学（こはじめ）——会社とサラリーマン』東方出版
- Angst, Linda Isako. 2003. "The Rape of a Schoolgirl: Discourses of Power and Gendered National Identity in Okinawa." In *Islands of Discontent: Okinawan Responses to Japanese and American Power*, ed. Laura Hein and Mark Selden, 135-57. Lanham: Rowman & Littlefield.
- Armitage, John. 2003. "Militarized Bodies: An Introduction." *Body & Society* 9, no. 4: 1-12.
- Badiou, Alain. 2007. "The Contemporary Figure of the Soldier in Politics." Talk presented at the UCLA Art Center in Pasadena, California. Available at [www.jacacn.com/badsold.htm](http://www.jacacn.com/badsold.htm).
- Cohn, Carol. 1987. "Sex and Death in the Rational World of Defense Intellectuals." *Signs* 12, no. 4: 687-728.
- Connell, R. W. 1995. *Masculinities*. Berkeley: University of California Press.
- Foucault, Michel. 2007 [1997]. *The Politics of Truth*, trans. Lysa Ochoth and Catherine Porter, ed. Sylvère Lotringer. Los Angeles: Semiotext(e).
- Frewert, Ute. 2001. *Die kasernierte Nation: Militärdienst und Zivilgesellschaft in Deutschland*. Munich: Verlag C.H. Beck.
- Frühstück, Sabine. 2003. *Colonizing Sex: Sexology and Social Control in Modern Japan*. Berkeley: University of California Press.
- . 2007. "De la militarisation de la culture impériale." In *La société japonaise devant la montée du militarisme: Culture populaire et contrôle social dans les années 1930*, ed. Jean-Jacques Tschudin and Claude Hammon, 109-22. Arles: Editions Piqueur.
- Fussell, Paul. 2002. *Uniforms and Why We Are What We Wear*. Boston: Houghton Mifflin.
- Geertz, Clifford. 1973 [1972]. "Deep Play: Notes on the Balinese Cockfight." In *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books.
- Gibson, James William. 1994. *Warrior Dreams: Paramilitary Culture in Post-Vietnam America*. New York: Hill and Wang.
- Goffman, Erving. 1961. *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*. Indianapolis: Bobbs-Merrill.
- Gray, Chris Hables. 2003. "Posthuman Soldiers in Postmodern War." *Body & Society* 9, no. 4: 215-26.
- "High Court: ASDF Mission to Iraq Illegal" 2008. *Japan Times*, 18 April. Available at <http://search.japantimes.co.jp/mail/m20080418a1.html>.
- Inoue Kyoko. 1991. *MacArthur's Japanese Constitution*. Chicago: University of Chicago Press.
- Jamesson, Fredric. 1984. "Postmodernism, or the Cultural Logic of Late Capitalism." *New Left Review* 146 (July-August): 53-92.
- Keisky, Karen. 2001. *Women on the Verge: Japanese Women, Western Dreams*. Durham: Duke University Press.

- Kimmorth, Earl H. 1981. *The Self-Made Man in Meiji Japanese Thought: From Samurai to Salary Man*. Berkeley: University of California Press.
- Mead, Margaret. 1940. "Warfare Is Only an Invention—Not a Biological Necessity." *Asia* XL, 402-5.
- Meyer, John W., John Boli, George M. Thomas, and Francisco O. Ramirez. 1997. "World Society and the Nation-state." *American Journal of Sociology* 103, no. 1: 144-81.
- Mosse, George L. 1996. *The Image of Man: The Creation of Modern Masculinity*. New York: Oxford University Press.
- Nye, Robert A. 2007. Review Essay: "Western Masculinities in War and Peace." *American Historical Review* 112, no. 2: 417-38.
- Ohnuki-Tierney, Emiko. 2002. *Kamikaze, Cherry Blossoms, and Nationalisms: The Militarization of Aesthetics in Japanese History*. Chicago: University of Chicago Press.
- Ortner, Sherry. 2006. *Anthropology and Social Theory: Culture, Power and the Acting Subject*. Durham: Duke University Press.
- Osawa Mari. 1994. "Bye-bye Corporate Warriors: The Formation of a Corporate-centered Society and Gender-biased Social Policies in Japan." *Annals of the Institute of Social Science* 19:157-94.
- Pyle, Kenneth. 2007. *Japan Rising: The Resurgence of Japanese Power and Purpose*. New York: Public Affairs.
- Roberson, James E., and Nobue Suzuki, eds. 2002. *Men and Masculinities in Contemporary Japan: Dislocating the Salaryman Doxa*. London: Routledge.
- Samuels, Richard J. 2007. *Securing Japan: Tokyo's Grand Strategy and the Future of East Asia*. Ithaca: Cornell University Press.
- Schmitt, Eric, and Thom Shankar. 2005. "Military May Propose an Active-duty Force for Relief Efforts." *New York Times*, 11 October.
- Sennett, Richard. 1992. *The Fall of Public Man*. New York: W. W. Norton & Co.
- Sheehan, James J. 2003. "What It Means to Be a State: States and Violence in Twentieth-century Europe." *Journal of Modern European History* 1, no. 1: 11-23.
- . 2009. *Where Have All the Soldiers Gone: The Transformation of Modern Europe*. Boston: Mariner Books.
- Urquhart, Brian. 2004. "The Good General: Tom Clancy, with General Tony Zinni (Ret.) and Tony Koltz. Battle Ready." *New York Review of Books*, 23 September.
- Vogel, Ezra. 1963. *Japan's New Middle Class: The Salary Man and His Family in a Tokyo Suburb*. Berkeley: University of California Press.

(内田雅克訳)